

戦後の松戸の作家たち

千葉大学工学部は終戦直後から1964（昭和39）年までの約20年間松戸にありましたが、この時代は日本工業の発達、技術革新とともに戦後デザインの高揚期にあたります。その間、東京工業専門学校から千葉大学工芸学部、次いで工学部と、学校と学部の名称を変えながら、「工芸」から「デザイン」への変貌を体験しました。（敷田弘子氏「松戸にあった千葉大学工学部の話―戦後デザインの歩みとともに」2011年）

なお本展に出品している千葉大学工学部（旧東京高等工芸学校）の教授陣では、和田香苗、寺畑助之丞、赤穴宏が松戸でも教えています。

松戸市の戦後の人口は、戦前に比べて格段に増加します。特に1960年代から日本が高度経済成長期に入ると、松戸市は首都圏の住宅都市として発展し、人口が急増していきました。それに伴い、松戸に住む作家も増えています。本展出品作家では、戦前松戸に住んだ作家が田中寅三と板倉鼎の2人（板倉須美子はごく短期間の滞在でした）に対して、戦時中から戦後に松戸に移り住んだ作家は、竹内栄三郎、宮之原謙、奥山儀八郎、長田国夫、及川修次の5人（転入順）です。また渋谷克己は戦後、松戸に生まれています。

1952（昭和27）年に結成された松戸美術懇話会には、本展出品作家のうち、奥山儀八郎、宮之原謙、竹内栄三郎、そして千葉大学工学部の助教授だった赤穴宏が参加しています。同会を母体として、1963（昭和38）年には松戸美術会が結成されました。松戸美術会は、松戸市教育委員会とともに毎年松戸市美術展覧会を開催して作品を公募し、松戸の美術愛好家層を広げてきました（2020年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため開催が見合わされました）。

1991（平成3）年、東京藝術大学が明治以来の上野キャンパスに加え、取手にキャンパスを開設したことから、両キャンパスを結ぶ常磐線沿線の松戸に住む作家が増えていると思われます。

松戸の作家たちの多彩な活動にこれからも注目していきたいものです。